

## ① 働きやすい職場づくりをサポートする「人事コンサルタント」のお仕事

下村勝光

こんなに皆さんのお役に立つことができ、自己成長感を味わうことができ、世の中での必要性もグングン高まっている仕事はありません、と自信を持って言えるのが、社会保険労務士(以下、「社労士」)という国家資格を生かしたコンサルタント(以下、「人事コンサル」)のお仕事です。

私が人事コンサルになったきっかけは、どんな会社や組織でも通用し自分の実力次第で何歳までも働くことができるキャリアを身に付けたいという想いを大学生の時から抱き、弁護士や会計士といった士業の業界に興味を持ったことです。

その中でも、「人に関する専門家」というキャッチフレーズの社労士に将来性を強く感じ、現在に至ります。実際のところ、人が働きやすい職場を作るため、という側面からのアプローチだけではなく、そこからさらに踏み込んで、経営全般のアドバイスまで行う、幅広い能力を持った社労士が世の中から求められています。

仕事の取組姿勢としては、上から目線で指導する先生業というスタンスではなく、お客様のお話をよく聞き、共に悩み、共に解決策を考え、真のパートナーとしてお役に立つ、というスタンスです。

具体的には、社長や役員・部長、人事総務担当者からの相談対応および有益な情報提供を基本に、働きやすい社内制度の構築や、制度を正しく運用できるように社内での勉強会講師や社員向けの研修まで行います。

相談内容も実に様々で、例えば

- (1) 頑張っている人にはもっと給与やボーナスを払いたいのですが、一番良い方法を教えてください。
- (2) パワハラ上司のせいで若手社員の退職が続いています。パワハラ上司は自分がパワハラをしているとは思っていません。どうすればいいですか。
- (3) 働きやすい会社にしていきたいのですが、何から着手すればいいですか。等々。。。

こうすれば解決しますよ、と簡単に答えが出る問題はありません。法律の範囲内で考えられる解決策をご提案していきます。難しい局面でのアドバイスを求められることも多いですが、その会社や登場人物の全員にとって良い方法を考えて提案すれば、なんとか問題は解決していくと感じています。

ポイントは、会社側だけ良しではなく、労働者側も良し、の「心のこもった解決策」を打ち出すことができるかどうか。このスタンスで問題解決できた時の喜びは本当に「よっしゃー」という気分です。

仕事とは志事(自分のなりたい姿に近づくこと)、働くとは「はた(周囲)を楽に(たのしく)すること」だと思います。

どのような仕事に就こうとも、どのような会社に入社しようと

も、ラクな仕事はありません。隣の芝は青い、という言葉があるように、つつい他人と比較する中で無いものねだりをすると、自分で自分の仕事を面白く無くしてしまいます。清教学園流に言うと、自らの意思で賜物を生かした仕事ができている、と実感できている時こそ、充実した人生を送れているということになるのではないのでしょうか。

学部選択としては、法律理論を学べる法学部や、人の深層心理を学べる心理学部が良さそうだと思います。ただ、出身学部よりも、人生経験が豊富なコンサルタントのほうが社長や経営幹部にアドバイスするときに説得力が出ますので、マンネリな場よりも少し緊張感のあるアウェーな場に積極的にどんどん参加し、自分を磨いて生きることが大事だと痛感しています。

最後に少しだけ業界の説明とお願いします。

社労士の規模は全国で約40,000人。大阪では約4,000人です。

仕事内容としては、大きく分けて3つの分野があります。

- (1) 役所に提出する書類の作成・提出
- (2) 老齢年金、障害年金、遺族年金という3つの年金に関する相談対応
- (3) 働きやすい職場環境を作るために必要となるルールの構築や実践指導

同じ社労士でも得意分野が違い、私は(3)「人事コンサル」が得意分野です。

業界的には行政手続きの電子化やAI技術の発達により、答えが決まっている(1)(2)分野の仕事は今後減少する方向となりますが、答えが決まっておらず、法律論を踏まえた上で働く人の気持ちを考慮したベストアンサーを考え出す(3)「人事コンサル」は、外国人労働者をはじめ多様な価値観や働き方が求められる中、今後ますます活躍の場が増えていきます。

しかし、社労士の中でも「人事コンサル」をしている方はまだまだ少数しかおられませんので、皆さんの中から「人事コンサル」として、一緒に業界を盛り上げてくれる方が出てくることを期待しています!



## ② ケアマネージャー(介護支援専門員)の仕事の紹介 ~仕事から学ぶこと~

中学保護者

日本は今、急速に高齢化が進んでいます。高齢化に伴い介護を必要とする高齢者の増加が見込まれていましたが、少子化・核家族化などで家族だけで介護することは大変困難です。「介護保険制度」は介護が必要な状態になっても、安心して生活できるように、介護を家族だけに負担させることなく社会で支えることを目的に、2000年4月からスタートしました。清教学園の皆さんはまだ生まれていないですね。

この介護保険制度では介護が必要になった高齢者に対して、自宅で介護を受けられるようなサービスや、通いあるいは泊り、施設などに入所して介護を受けられるサービスなどが準備されています。そのサービスを介護が必要になった高齢者が受けられるように手続きする人が「ケアマネージャー」、正式名称は「介護支援専門員」と言います。

ひとりひとりの高齢者の家族構成も違えば家の環境も違う、体の調子も違う、何よりどのように生きていきたいか、生活の中で大切にしていることがそれぞれに違います。だから介護が必要な状態になった時に受けたいサービス、必要なサービスもそれぞれ違います。

例えば、歩けなくなった高齢者のAさんは奥さんや息子さん家族と一緒に住んでいるので、食事の準備や介助は特に心配ありません。同じように歩けなくなったBさんが一人暮らしであったら食事はたちまち困ります。ヘルパーさんに買い物や調理をお願いするか、配食の弁当を頼むか、デイサービスに行ってきたくさんの方と一緒に昼食を食べるか…いろいろな支援の中からBさんに選択してもらいます。ケアマネージャーはヘルパーさんが買い物や調理をするような直接の援助はしません。ケアマネージャーは高齢者に援助してくれる人やサービスを繋げること、繋げた後に高齢者の方の生活が少しでも良くなったか確認し、見守ることが仕事です。

介護保険のサービスは原則は65才以上の方が対象ですが国が定めた病気によっては40才以上で利用できます。

50代の男性Cさんが治療法のない難病で、手や足のふるえ、自律神経失調で普通に座っているだけでも血圧が下がって失神するという困った症状があり、「あと5年ほどしか生きられない」と医師から言われていました。病気を診断された当初は歩行も食事でもでき、将棋や読書も可能でしたが、3年ほど経過するとじっとしていても手や体は大きく震え、スプーンも手すりも持てなくなりました。足も体も震えるので何度も転びました。失神の症状はなかったので座ることはできましたが、テレビを観ることしかできなくなりました。二人の娘は学生で奥さんは働かなければなりません。日中、自宅で一人のCさんの昼食や水分は口まで運ぶ介助が必要になり、排泄はトイレまでの歩行を介助し、失敗した時には紙パンツの交換の介助も

必要になりました。180cm以上あって体が大きく揺れるCさんの介助を安全にするのは至難の業でした。サービス事業所に情報を伝え、支援をお願いしました。家に1人でいるより安心だとデイサービスを利用しました。仕事と介護で疲れている奥さんが休憩できるように、泊まって介護が受けられるショートステイも利用しました。

介護保険での援助、サービスを受けるときには「担当者会議」を開きます。介護が必要な方の家で、サービスにかかわる様々な職種の人が集まり、どのようにその方を支えるか話し合います。Cさんの担当者会議には10畳以上あるリビングに大きな輪ができるほどの人、保健師・看護師・理学療法士・栄養士・ヘルパー・福祉用具の担当者・デイサービスの介護福祉士・作業療法士・ショートステイの相談員・送迎担当者が集まりました。症状が進み、Cさんが自分でできていたことができなくなるたびに、まずその情報がケアマネージャーに連絡が来ました。自宅に集まり、手すりの位置やベッドの位置、歩行や食事・排泄介助の方法、自宅の玄関の階段を下りる方法など本人も交えて何度も話し合いました。これだけの人がCさんを支えているのだな…と心強く感じました。Cさんは診断を受けて5年目に朝から久しぶりに失神発作を起こしました。ベッドの頭もとを少し上げて普通に座っているだけで血圧が下がってそのまま亡くなりましたが、奥さんは最期まで本人の希望を聞きながら生活できたことに深く感謝されていました。

ここで皆さんにお伝えしたいことが三つあります。

一つは「人は一人では生きていけない」とよく言われますが、それは介護が必要になった方だけのことではないということです。ケアマネージャーも一人では何もできません。協働という言葉通り、支援するそれぞれの職種の専門性を発揮してもらってともに支えていくのです。ケアマネージャーはその調整を担うのです。この時にCさん支えてくださった方とは事業所は違いますが今でも相談し合うなど交流が続いています。

二つ目は本当に困った時に「困っています、助けていただけないでしょうか」と本気で声をあげると本当に助けてくれる人が現れるということです。Cさんの事例は仕事上の話ですが日常生活でも言えることではないでしょうか。

三つ目は私もCさんのような事例を積み重ねて知識や技術を豊富にしているということ。ケアマネージャーは支援する側のようなのですが、支援する方々からたくさん教えられ、与えられているのは実は私なんだと気づかされます。ケアマネージャーは通常、医療や介護の仕事で5年続けることで試験を受ける資格を得ます。ケアマネージャーだけでなく医療や介護の仕事は人と関わる良い仕事だと自負しています。